

東部王記天慶三年閏七月十三日、依右大將請詣彼家相撲人歸饗等、寢殿南廂設客座、下母屋簾、施四尺屏風。

〔空穂物語樓の上之下〕三尺のびやうぶ四でふからあやにもろこしの人のゑかきたりけるを、こゝにてたいまやうのはらせ給て、ひとよろいづ、ふたつのろうのはまゆかのうしろにたてたり。

〔延喜式内匠〕屏風一帖略。骨料、楡樽二材半、檜樽一材、方長五尺二寸。

伊勢初齋院裝束

五尺屏風四帖料略。楡樽十材骨料、檜樽一材押料。

〔類聚雜要抄〕四、五尺屏風十二帖

一帖雜事略。骨六枚料、楡太樽四寸、高五尺、弘一尺八寸二分、但當時可隨絹弘、襲木廿四筋、長十二、短十二、黒塗、骨襲等工作料、准絹六疋、乃米一斗。

〔榮花物語衣珠〕御屏風どもには略。中へりにはからのにしきのぢあをきをせさせ給へり、おそひには皆まきゑしたり、うらにはかう染のかたもんのおりもの也。

〔調度歌合〕二番 右
いもにこひうきとし月をふるびやうぶ骨もあらはにやせなりに見
びやうぶ

〔貞丈雜記家作〕一、禁裏の御屏風は、てうつがひの所革なり、革を紙にて打付くるなり、紙のてうつがひの如く、うらへも表へも折る事はならず、定めたる如く、一方へ計折る也、これらは名ある御

屏風の事なり、是れ唐風なるべし、御内所にて常に立つる新調の御屏風は、常の如く成るべし、

〔類聚名物考調度〕四、錢形屏風。今年安永五年三月、京東福寺にて開帳ありしに、禁裏より御寄附の御物の屏風あり、蝶番を紅革にて丸く切て、銀の紙にて打下たり、是を錢形の屏風と書付あり、